HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パレートのイデオロギー論
Author(s)	佐藤, 茂行
Citation	經濟學研究, 41(1), 43-56
Issue Date	1991-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31877
Type	departmental bulletin paper
File Information	41(1)_P43-56.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 41-1
北海道大学 1991.6

＜研究ノート＞

パレートのイデオロギー論

佐藤茂行

まず，われわれは，ここでイデオロギーを「人間の行為を規定する信念または価値観の体系」と一般的に定義しておこう。そのうえで，本稿で用いるイデオロギーの概念と，これに関連するいくつかの概念をパレートの理論と対応させて定義しておこう。

パレートは客観的現象（相互依存関係）の正しい反映が感情によって妨げられるところから生ずる主観的現象と，感情の排除によってこの客観的現象が，そのままに近いかたちで主観に反映される主観現象とを区別する。そこで，前者，つまり感情によって客観的事実の正しい反映が妨げられているような主観現象を，パレートにしたがって「幻想」と名づけることにする。後者はパレートの科学的［実験的］認識に相当する。

つぎに，以上のような客観の歪んだ反映を歪みとして意識していない状態，つまり自らの幻想を幻想として自覚していない意識の状態を「虚偽意識」と名づけることにする。この状態はパレートの「感情とか無意識などといった一定の心理状態」のもとでの判断にほぼ対応するであろう。そして，この虚偽意識にもとづいた，行為の規範ならびに行為を正当化する信念の体系をイデオロギーと名づけることにしよう。

体系である以上，それは多かれ少なかれ何らかの論理によって構成されている。パレートは，この論理のうち，自分自身ならびに他人にたいする説得を意図した論理（推論）を「派生」と呼んでいる。そして，こうした論理によって構成された理論のことを「派生体」と呼んでいる。この説得を目的とした派生体つまり理論がパレートのイデオロギーの主要な形態にあたる。パレートはこの種の理論の典型として形而上学的理論と疑似科学的理論を挙げている。

パレートは，こうした理論つまり説得のイデオロギーを，真理性すなわち客観的事実を正しく反映しているかどうかという面と，そのイデオロギーがもつ社会的効用の面という二つの側面から考察している。このように，パレートは真理性を基準にしてイデオロギーの非科学的性格を明らかにする一方，真理性とは別に，このイデオロギーが果す社会的役割を解明している。そして，そうした役割を果たすこのイデオロギーを社会変動の基本的要因の一つとして取り上げ，その役割にかんする詳細な分析を行っているのである。このように，説得の論理によって構成された信念の体系（イデオロギー）を，真理性の面はともかく，社会的効用の面から論じているところにパレートのイデオロギー論の特徴があると言える。以下，本稿では，こうしたパレートのイデオロギー論を，その『一般社会学概論』[1]に焦点を絞って見ておくことにしよう。

1）以下，この著作［2］にかんする引用ならびに参照箇所については，たとえば，TR 1234 というように表記する。TR はこの著作の略号で，数字はパラグラフ番号を表している。この著作では，原則として，パラグラフ毎に番号が付されている。この番号によって，イタリア語版は，もちろんのこと，フランス語版，英語訳，日本語訳（抄訳のため，2060-2612の範囲）のいずれからも当該箇所の

『一般社会学概論』とイデオロギー論

『一般社会学概論』を支える二本の柱はイデオロギー論とエリート論にあると言える。この著作は，第1章　序論，第2章　非論理的行為，第3章　学説史上の非論理的行為，第4章　経験を超えた理論，第5章　疑似科学的理論，第6章　残基，第7章　派生，第8章　残基と派生の特質，第9章　社会の一般的形態，第10章歴史上の社会均衡，といった計10章からなっている。

これらの編成をイデオロギー論の観点から解釈すると，つぎのような構成になっていることがわかる。まず第1章の序論は措くとして，第2，第3章の主要な内容は，イデオロギーを支える行為にかんする説明，第4，第5章では，イデオロギーの主要な形態が扱われている。そして続く二つの章で，これらのイデオロギーの基礎が解明されている。すなわち，第6章ではイデオロギーの基礎にある感情と，その感情の表現としての残基が扱われ，第7章では派生つまりイデオロギーの説得の論理と体系が究明されている。そして第8章で感情と，感情にもとづく理論構成との相互関係が検討されたうえで第9，第10章では，これまでの章をうけて，エリートの循環を基軸とする社会変動または社会均衡と感情との関係が論じられているのである。このうち第9章ではエリートの循環とイデオロギーの社会的効用との関係が論じられていることが注目される。

さて，『一般社会学概論』でのこうした論議が，それまで折りに触れてなされてきたパレートのイデオロギー論の集大成であり，体系化であることは言うまでもない。この著作の特徴として，とりわけ第2章の非論理的行為と第6章の残基そして第7章の派生で，それぞれ精緻な体系化がなされている点が注目される。以下，派生論を中心に，この著作のイデオロギー論を見ていくことにしたい。

非論理的行為

パレートは例によって社会現象を客観的現象と主観的現象とに分けている。そのうえで，この区別を人間の行為の目的と手段との適合関係と結びつけて説明する。すなわち，パレートは人間の行為を論理的行為（azioni-logiche）と非論理的行為（azioni non-logiche）とに分ける。論理的行為というのは目的と手段の関係が事実の面つまり客観的にも，また行為する人間の意識の面つまり主観的にも適合しているような行為のことである。これにたいして非論理的行為は，このような論理的行為以外の行為全体を指す。したがって非論理的行為というのは論理的行為の補概念であって，これにたいする積極的定義は与えられてはいない（TR 150）。

非論理的行為は四つのタイプに分類される。1）目的にたいする手段が客観的にも主観的にも適合していない行為。2）目的にたいする手段は客観的には不適合であるが，主観的には適合している行為，言い換えると行為主体自身は目的にたいする手段が適合していると信じている行為。3）目的にたいする手段は客観的に適合しているが，行為主体はそのことを意識していない行為。4）目的にたいする手段は客観的にも主観的にも適合しているが，両者の適合が一致しない行為。

パレートによると，人間には自分の行為を論理的に正当化するという，きわめて顕著な傾向がある。このことから，(2)の行為と(4)の行為がイデオロギーとのかかわりで重要な人間的行為ということになる。まず(1)の行為は，たとえば客観的目的を失った習慣とか儀礼にもとづく行為などがそれに当たる。(2)の行為は，たとえば(1)の行為を論理的に正当化する行為，(3)の行為は動物などの本能的行為が，その典型である。

確認が可能である。なお，文中の用語をとくに紹介する場合には原語（イタリア語）を示しておいた。

そして(4)の行為は，たとえば伝統とか独善的な使命そして道徳などの一般基準に従う行為がそれに当たる。(4)の行為には，主観的目的の追求（手段）が，その目的とは異なった客観的結果（目的）を生むような行為が含まれる。たとえば経済現象では自由競争のもとでの事業家の行為の一部がこの行為に入る。この行為についてパレートは『経済学講義』の例示[2]を参照するように求めているが，その例というのは，事業家が生産費を減少させる努力をしたにもかかわらず，競争によって，そのとき期待していなかった販売価格の低下という別の結果が得られるというものである（TR 154, 155, 159)。

さて，このような「非論理的行為は一定の心理状態すなわち感情や潜在意識（subconscienza）などから主として生み出される」（TR 161）という。パレートは，このような心理状態の分析にかんしては心理学の課題だとして，この問題についてはそれ以上の追究は避け，ともかくこの心理状態を与件として研究をすすめている。そして，とりわけ人間の行為のうち，もっとも特徴的なのが(2)と(4)の行為であるところから，これらの行為を中心に主観の働きが分析されているのである。

残基と派生

非論理的行為の分析に際して，パレートは残基（residui）と派生（derivazioni）という独自の概念を導入している。これらの概念は多数の事実から帰納的に導きだされた一つの仮説と考えられている（TR 2399)。このうち残基というのは，感情にもとづく理論の基底にある恒常的要素を指している。派生というのは，残基にもとづく推論とその推論によって構成される可変的な理論体系を指す。実は，パレートは，この推論と，その結果としての理論体系とを厳密に区別し，前者を派生，後者を派生体(derivate)，あるいは表示（manifestazioni）と名づけている（TR 868, 1688)。ただ，この著作のなかでは，派生体という用語は，ほとんど使用されず，多くの場合，派生という表現で派生体が指示されている。このことは，パーソンズも指摘しているように[3]，推論としての派生と理論体系としての派生体とが混同される一般的傾向を生む一つの原因となっている。

残基という意味は，理論的説明（派生）を取り去った後に「残る」恒常的要素を示している。他方，派生は文字通り，そうした残基からの派生，派生体はその派生の体系という意味を表している。パレートはこの残基と派生との関係を古典語研究における語根と派生語のアナロジーによって説明している（TR 879)。

さて，この残基は非論理的行為を説明する推論の原動力に当る，感情や本能の表現であるとされている。パレートはここでも残基と感情や本能との関係を，温度計と温度との関係のアナロジーによって説明している。すなわち残基は感情や本能の表現であるが，それは，ちょうど温度計の水銀柱の上昇が温度の増加の表現であるのと同じようなものだというのである(TR 875)。なお，派生に派生体を含めて表現する場合と同様，パレートは残基という用語に感情をも含めて，しばしば表現している。つまり残基という用語で感情を指す場合が往々にしてあるということである。ただし，派生に派生体を含めて表現するときと違って，このような用語の使い方については断り書きがある（TR 1690)。

ここで留意しなければならない重要なことは，残基というのは，あらゆる感情や本能を表すものではないということである。残基というのは，あくまでも推論を分析してえられるものであるから，感情や本能一般ではなく，推論を生み出す，その限りでの感情や本能を表しているということである。したがって，推論と結びつかない単純な欲求とか嗜好，性向などと結びついた

2）［3］§719

3）［4］pp. 198-199：［5］p. 107

感情とか本能は残基をもたないから，ここでは扱われない(TR 851)。同様に，ここでは利害を表す感情も扱われていないが，こちらの方は後に触れるように，利害が社会変動にとって非常に重要であることから，残基とは，いちおう切り離して扱う必要があるという理由による。

つぎに留意すべきことに，本能と感情との関係がある。パレートは残基は感情を表すという言い方をしばしばおこなって，本能を表すとは言っていない。しかし残基に関係した本能は実際上は感情を通じて表現されるわけだから，残基は感情を表すという言い方をするときには感情のなかに本能が含まれているものと理解してよいであろう[4]。

以上のような用語の使い方や残基のさまざまな形態の説明からみて，結局，残基というのは非論理的行為の主因の説明に際してなされていた，感情や潜在意識などといった「心理状態」を表現したものと解釈するのが，もっとも妥当と思われる。パレートはこのような心理状態を一括して感情と言っているのであろう。

さて，それにしても感情の表現としての残基は，具体的にどのようなかたちで示されるのか。これについてパレートは，かならずしも明示的な解説はしていない。しかし，パレートは残基が一般的な言語表現の形式をとると考えていたことは疑いない。たとえば，「ある特定の残基もしくは，それらの残基を表現する命題」(TR 1773)という言い方とか，残基と派生を含む感情表現の全体を，イタリア語版では「言い回し(detti)」[5]と述べていることからも，それは窺える。こうして見ると，パレートは残基を一般的には言語形式をとった感情表現としてとらえ，この表現と推論形式（派生または派生体）との関連をとくに問題にするときには，命題形式の表現を想定していたと思われる。たとえば，残基がある結論の前提命題の形式をとるといったような場合がそれである。

アロンは「残基は具体的な実在ではなく，現象を説明するために観察者がつくり出した分析的概念である」としている[6]。またパーソンズは，これを「常に，命題の形式をとった感情の表出である。その命題は一群の理論に共通する主要な前提として役立つ」と説明している[7]。

以上から，つぎのようなパレートのイデオロギー論の構造が明らかになる。すなわち，本能的な感情を含む一定の感情が明示的または暗示的な命題のかたち（残基）で表現され，これらの命題を前提とする推論（派生）を通じて理論（派生体）がつくりあげられる。そして，この感情を説明する理論が信念の体系すなわちイデオロギーの注目すべき主要な形態とされるのである。経験を超越した形而上学的理論とか疑似科学理論は，いずれもこのような基本構造をもった重要なイデオロギーである。したがって，さきに紹介したように，これらの理論に，それぞれ一章が割かれているのである。

さて，つぎに，このような理論と一般的に関連する残基を見ておくことにしよう。ただし一般に残基も派生も単独では働かず，複合して機能するものと考えられている。とりわけ，派生体の核心には，一つ，または，いくつかの基本的な残基があり，その残基の周りに副次的ないくつかの別の残基が寄り集まっているというかたちが指摘されている(TR 1397)。したがって，これらの理論にも一般と特殊の複数の残基が関連していることを，あらかじめ指摘しておこう。

まず，基本的な残基[8]として，組み合わせの本

4）パーソンズもこの解釈をとっている。[4]p. 215：[5] p. 132

5）「こうした仕方で，ある感情（もっと適切に言うと，感情の複合体），心理状態などを表現していると考えられる言い回し（i detti）は多様であり（molteplici），変化に富む(vari)。これらの言い回しを恒常的部分と可変的部分とに分離することによって残基と派生が得られる」(TR 1690)。

6）[1] p. 431

7）[4] p. 198：[5] p. 106

8）パレートは残基を大きく六つに分類している。以下に示すI，II，IV，Vの他に，IIIのカテゴリーとして「外面的行為によって感情を表現する欲求」

能（Istinto delle combinazioni）と呼ばれる残基（以下，残基Ⅰと略称）と集合体への固執（Persistenza degli aggregati）と呼ばれる残基（以下，残基Ⅱと略称）とがある。これらの二つの残基は社会変動に重要な役割を果たすものとして重視されているが，それに劣らずイデオロギーの形成にも重要な意味をもつ。

残基Ⅰは，論理的であれ非論理的であれ，なんらかの事物を組み合わせようとする本能を表している。そして，この本能は人類の文明をもたらした重要な要因とみなされている。この本能は事物についての科学者の論理的推論ばかりでなく，無知な人間の幻想的で，たわいのない不条理なつじつま合わせなどにも示されているという。

この残基のなかでも，とりわけイデオロギーと深いかかわりがあるものに，1）残基を結合する欲求を示すものと，2）論理的展開の欲求を示すものとがある。

(1)は，実生活または実践に欠かせない，事物を総合する性向の表れであるが，これによって人はさまざまな残基を組み合わせようとする。曖昧で多義的な言葉が用いられるときには，この組み合わせの性向が重要な役割を果たす。また，この欲求は信念と経験とを結びつける欲求としても働く（TR 966，967，969）。

(2)は，「良し悪しはともかくとして，論理的に考えること（ragionare）を欲する」人間の性向を指し，それは厳密な論理によっても，また疑似的論理によっても十分満足させられる。論理・実験的科学も神学，形而上学もこの論理的展開の欲求から出発している（TR 972）。注目されることは，「非論理的行為を論理的うわぬりによって覆い隠そう」としたり，「疑似的論理によって，論理や推論についての欲求を満足させる」働き，つまり派生の働きがこの論理的展開の欲求から生み出されているという指摘がなされていることである（TR 975）。

つぎに，残基Ⅱについてみよう。ある事物の組み合わせが，一つの身体のように緊密に結びついた部分の集合体としてとらえられ，他の現実の存在と同じような個性を獲得するようになったとき，その集合体を保持する本能が働く（TR 991）。この集合体に固執する本能を表現するのが，この残基である。この残基のなかで，とくにイデオロギーの成立に関与するものとしては，1）抽象的観念にたいする欲求と固執，斉一への固執，新しい抽象観念への欲求の残基，2）宗教と関連した，家族と血縁集団の関係の残基が挙げられる。

(1)は，つぎのような場合に働く。前記の事物の組み合わせによって形成された関係の総体に対応して，ある抽象的観念が生み出され，その観念の持続によって新しい主観的存在がつくり出される。このような抽象観念が，すたれたり，何らかの原因によって斥けられたりしたときにも，この抽象観念にたいする欲求が働いて，消失したり弱まったりした古い抽象観念に代わって，たえず新しい抽象観念がつくり出される。このことは，超自然的抽象観念から形而上学的抽象観念，そして疑似科学的抽象観念へといった思想史的変遷がよく物語っているという（TR 991，1065，1086）。

他方，(2)は，集合体を持続させる感情の表れであり，この残基は親と子の結合を通して形成される（TR 1016）。宗教は一般にこの集合体を持続させる感情の主要な表現の一つとみなされている（TR 1021）。そしてイデオロギーの多くが，こうした宗教感情から生み出されることが，しばしば指摘されている。

以上，二つの代表的な残基は，社会理論の領域で機能するばかりでなく，経済や政治の分野でも大きな役割を果たすことが明らかにされている。たとえば，残基Ⅰの感情は，経済にあっては投機家，政治にあっては策略を弄する狐の性質をもった政治家に，そして残基Ⅱの感情は，同じく経済にあって金利生活者，政治にあって

およびⅣの「性的残基」がそれである。これらの残基は，それぞれが，さらに細かく一ないし二に下位分類されている。

は力に訴えるライオンの性質ををもった政治家に，たっぷり備わっており，それぞれの分野でこれらの残基が少なからず影響を及ぼしているというのである（TR 2178, 2235）。

さて，この二つの残基は社会変動の分析に際して，まず第一に取り上げられるべき要素として扱われているのであるが（TR 2415），この二つ以外にも，社会変動に関係した，いくつかの重要な残基がある。ここでは，「社会性にかんする残基（Residui in relazione colla socialitâ」」（以下，残基IVと略称）と「個人とその依存関係の保全の残基（Integritâ dell'individuo e delle sue dipendnze）」（以下，残基Vと略称）について紹介しておこう。

残基IVは，文字通り社会性にかかわる感情を表すもので，そのなかには人道主義の理論とか「幸福にたいする権利」の理論を生み出す感情などが含まれている。とくに，ラ・ロシュフコーを想わせる，人道主義の根底にある感情は「他人に投影された（rifllessa）自己への哀れみ」に他ならないという指摘（TR 1139）が目を引く。

残基IVのなかには，これらとならんで，社会の存続にとって大切な感情とされる，他人の幸福のために労苦を買って出るとか，自分の財を他人に分け与える感情といった，思いやりや，同情の感情が含まれている（TR 1145, 1149）。また，同じく，この残基のなかには，自分の属する社会集団に帰服する感情を含む位階性の残基（TR 1153）があり，これは集団の是認を求める感情とともに社会主義運動の一つの支えとなっている。また，知識人の社会主義に多く見られる禁欲主義の残基も，この残基に含まれる。

残基Vについてみよう。この残基の説明で注目されることは，「利害と称される感情の総体が，この残基と同じ性質をもつ」という指摘がなされていることである。つまり利害に対応する感情が，この残基に含まれているということである。ただし，パレートは，厳密に言うと利害に対応する感情はこの残基Vに含めるべきだが，この感情は社会均衡にとって不可欠な，きわめて重要な要因なので，残基Vとは切り離して別に考察する方が有益だと述べて，ここでは扱ってはいない（TR 1207）。

さて，残基Vには，この他の残基として社会均衡の変化に反対する感情とか，下層の人間に見受けられる平等への欲求の感情などが含まれている（TR 1208, 1220）。このうち，前者が残基IIと結びついたとき，後に見るような「正義の理想」といった表現がなされることになる。後者は社会主義の主張を受け入れる素地となる重要な感情と結びつく（TR 1857）。

派生の特性

派生というのは，すでに触れたように，非論理的行為を促す感情を表すいくつかの命題（残基）を疑似的論理によって結びつける働きのことである。言い換えると，派生というのは感情を表現する複数の命題を体系的に結びつける疑似論理的推論のことである。そして，この推論によって構成された命題の体系が派生体つまり理論というわけである。

このことからも明らかなように，第一に，派生や派生体というのは推論や理論一般を指すものではなく，あくまでも非論理的行為とか感情を説明する論理とか理論のことを指しているということである。「人びとの，自分のいくつかの行為の仕方に本来備わっている特性を包み隠したり，すり換えたり，説明したりしようとするやり方に注意するならば，そこには，いつでも派生が見出される」（TR 1397）というわけである。

第二に，人は，このように派生による「論理的」説明を介して行為の規範や行為のあり方などを納得する。この納得は人びとが，すでに，漠然としたかたちで抱いている考えを派生が，はっきりと表現するからでもあるが（TR 1747），この納得は，根本的には派生の根底にある感情によってもたらされるのである。論理・実験的科学の場合と違って，論理だけの力による納得

ではない。つまり派生そのものには説得力がないということである。

「人間は，とりわけ感情（残基）によって説得される。したがって経験からも確かめられることだが，派生は，論理・実験的な考察からではなく，もしくは，少なくとも，そうした考察だけからではなく，感情からその力を引き出すことが予想される」（TR 1397）。

「通常，社会問題にかんする説得力は演繹的論理よりは，むしろ主として感情にもとづいている。演繹的論理が受け入れられるのは，とりわけ，それが感情に照応しているからなのである」（TR 802）。

第三に，残基がほとんど変化しないのにたいして，派生は，たえず変化するということである。一般に，非科学的な理論の場合，ある派生の形態が打ち破られると，ただちに別の派生が現れる。つまり，ある残基をある結論（目的）に結びつける推論（派生）が役に立たないことがわかると，その結果，かならず新しい派生が，その打ち破られた派生に，とって代るというのである（TR 1416）。

さて，派生そのものは，すでに紹介したように，疑似論理を含む論理的展開の本能および抽象観念への固執の欲求（感情）から生み出される。これらの本能や感情は派生そのものを一般的に促すものであって，それぞれの派生の根底には，それらの派生を直接生み出した，特殊な残基が前提されている。たとえば，下層の人間の平等にたいする残基（感情）は，自分の利益のかわりに社会階級の利益を全面に押し出す派生を生むが（TR 1220），平等の感情を正当化するその推論（派生）そのものは，論理的展開とか抽象的観念（この場合は平等）に固執する残基に促されているというわけである。

派生の形態

派生によって構成される派生体つまり非科学的理論には，いくつかの型がある。一般に派生体は残基によって示される命題を基本的前提とした命題の論理的複合体と解することができる。したがって，その複合体には同語反復による断言，たとえば社会性にかんする残基にもとづく派生体に当る，「人が，このようにするから，このようにする」といった，もっとも単純な形態から神学理論のように複雑で精緻な推論の鎖で結ばれた形態に至るまでさまざまなものがある。パレートは，このような断言にもとづく単純な派生体や，残基IIから生み出される権威にもとづく論証や説得を目指す派生体と並んで，形而上学的理論や疑似科学的理論に見られる派生体を明らかにしている。

まず，形而上学的理論。これは経験を超越した形而上学的実体（概念）にもとづく理論である。こうした実体は一般に漠然とした，とりとめのない感情を表現している。たとえば，これらの理論で用いられる《正しい》とか《良い》という言い方は，ピタゴラスやコントが《完全な》数を主張したときの《完全な》というのと同様，その意味が，まったく曖昧で恣意的であるという（TR 965）。形而上学的理論では，そうした曖昧さをもった，正しい理性，自然，人間の目的，最高の幸福，正義，真理，善，そして現代では，とりわけ科学とか民主主義，連帯，人間性などの概念が駆使されている（TR 1513）。この種の曖昧な概念にもとづく推論からなる理論はいずれも名称と事物の神秘的な結びつきを図る形而上学的理論だというわけである（TR 1544）。

これらの形而上学的実体は，残基Iに論理的外見を与える役割を果たす（TR 1530）。このことからも知られるように，この実体は主として教養ある人間に利用され，受け入れられる。たとえば，A. コントは，抽象観念に具体的性格を

与えようという抗しがたい力に駆り立てられて人類を人格化するまでに至っているとパレートは述べている。いずれにせよ，人類の幸福を求める強力な実体的概念である連帯とか進歩，人間性，民主主義といったものは，庶民にとっては理解し難い雲の上の話だというわけである(TR 1511，1512)。

つぎに疑似科学的理論。これは観察によって検証されうる経験的事実にもとづく推論からなる理論である。ただし，以下のような特徴をもつ。この推論には，不可欠の要素として，経験を超越した抽象的観念もしくは原理が用いられているということである(TR 479)。こうした抽象的原理は一般に多かれ少なかれ省略されるか，もしくは隠蔽されている。したがって，そこでは経験的事実にもっぱら依拠した推論がなされているように見える(TR 633)。要するに，疑似科学的理論というのは，科学的つまり論理・実験的な手続きをとっているように見えながらも，そのなかに経験を超越した原理を，ひそかに忍び込ませている派生体のことを言う。社会問題を扱った大部分の理論には，この種の原理が多かれ少なかれ含まれているというのである(TR 641)。

以上のような形而上学的理論や疑似科学的理論で注目されることは，感情が，独立した一つの原理の形態をとっており，しかも，その原理と感情との一致が，あくまでも追求されているということである。

こうした派生のなかで，社会生活において非常に重要な役割を果たすものに，個人的利益と集団的利益との対立の解消を目的としたものがある(TR 1479)。この派生で，もっともよく用いられるのが，これら二つの対立する利益を混同させる推論である。すなわち，これらの二つの利益は本来は同じものであり，個人が社会集団のためにつくすことは自分のためでもあるということを「形而上学的雲に覆われたタブー」とかア・プリオリな道徳的原理にもとづいて論証する派生がそれである。たとえば，すべてのものは相互に依存し合うという「原理」にもとづいた推論，つまり各人は他人に依存するのであるから他人の幸福を図らなければ自分の幸福は得られないと説く「連帯の理論」の推論などがそれであるという(TR 1483，1497)。

このような理論的推論でなくとも，日常的によく知られている推論として，自分の利益を追求するために集団的利益なるものを利用するものがある。この種の派生は人びとの社会性の感情に訴えることによって効果を上げる。パレートはつぎのような例を挙げている。

「(こうした派生は)何ものかを得ようとして，それを自分自身のためではなく，ある集団のためにそれを要求する振りをする人間によって，よく使われる。ある何人かの政治家は，自分自身のために何かを求める。かれらは，党のためとか地域のため，祖国のためにそれを要求する。ある労働者は自分たちの境遇の改善を望む。そこで，かれらは《プレロレタリアート》のためとか《労働者階級》のためにその改善を要求する。ある産業家は自分の産業のために政府の保護を受けようとする。そこで，かれらは，産業一般のためとか，勤労者階級のために，それを要求するのである」(TR 1498)。

同じようにして，時代や社会によって異なる道徳的関係とか法的関係が絶対視され，これが社会的原理とされる。こうして自然法にみられる社会契約とか連帯，法による平和の理論がつくりだされる(TR 1501)。たとえば，ルソーとかホッブスの社会契約論についてみると，これらの派生体は，それぞれの時代の社会条件に適合するために形を変えたものであることがわかる。それらの理論の根底にある，集合体への固執という残基IIの目的は変わらない。ルソーの理論もホッブスのそれも結論では対立しているが，この目的にかんする限り同じである。つまり，社会秩序の維持という目的にかんしては変りがない。今日，民主主義の時代であればこそ，

ルソーの理論も流行しているが，将来，絶対的権力が望ましい時代が再びやってくるとき，ホッブスの理論が有力になるであろうとパレートは述べているのである（TR 1507)。

派生と利害

さて，これまでの説明のなかで，疑似科学的理論などの派生を促す感情のうちでも，利害にもとづく感情が社会生活のなかで，きわめて重要な役割を果たしていること，そして，この種の派生は，よく知られていることが指摘されていた。そこで，利害と派生体との関係について，ここでもう少しくわしく見ておくことにしよう。

パレートは，すでに紹介したように，利害に対応する感情を残基とは切り離して扱うことを表明していた。利害と結びついた感情は残基や派生体とともに社会均衡の主要因となるものだからである。すなわち「残基に対応する感情または本能は，欲求，利害などに対応する感情または本能とともに社会均衡の決定に主要な役割を果す」（TR 875）ものだからである。

利害は，これを反映する感情のほかに，理性つまり損得勘定を通して社会均衡の決定に関与すると考えられている。パレートは，こう述べている。「個人や集団は……本能や理性に促されて，有用な物質的財貨や生活享受品を獲得しようとする。これらの行為を促すものの複合を利害と名づけることができる」（TR 2009)。

つまり利害は，感情をも含んだ人間の利害関心を媒介にして機能するものと考えられているのである。パレートは，この利害関心が，これらの残基や派生に影響を与える点に注目している。とりわけエリートの循環と一体となった階級間の利害が残基に影響し，その結果，派生に変化が起こる場合をパレートは重視して，これについて詳細な分析を試みているのである(TR 2212 以下)。

一般に，派生がエリートの循環による新しい条件に適応して変化することは，容易に理解される。また，変化の度合はもっと少ないが，利害と結びついた経済的条件の変化の影響も受ける。このように，派生はこれらの循環や経済的条件の結果と見なすことができる。パレートは，つぎのような例を示して，それを説明している。

「ある支配階級のなかで，組み合わせの本能に勝る成員が多くなり，支配階級が正々堂々とした直截な力の行使を避けるようになるにつれて，派生はこうした考え方に適合するようになる。人道主義や平和主義が生まれ，横行するようになり，世の中が論理や理性によって成り立ちうるかのように論じられる。他方，伝統はすべて古くさい偏見と見なされるようになる」(TR 2324)。

こうした傾向は，たとえばヨーロッパとくにフランスの18世紀末と19世紀後半以降の文学作品を見れば容易に認められるとパレートは言う。他方，これらの作品とならんで，支配階級と，それを支える人間の利得の分け前を変化させることを主として狙った作品も育まれているとも述べている（TR 2324-2325)。

その他，こうしたエリートの循環と結びついた利害が派生体に与える影響をパレートは自由貿易と保護貿易の理論について明らかにし，また同じことを個人主義と国家主義の理論についても示唆している。たとえば，エリートの循環と利害が自由貿易によって促進されるときには，利害の科学である政治経済学のなかに自由貿易に有利な理論が現れる。そして，これは保護貿易についても同様であると（TR 2553)。

派生と言語の役割

派生すなわち推論は一般に日常語を用いてなされる。だが，この日常語には正確さが欠けている。つまり一般に，日常語は明確に限定された事物に対応していない。そこで，派生は，この日常語の曖昧さを利用して論理の欠陥を隠蔽

したり，説得を試みたりするという（TR 1543, 1545)。一般に派生にもとづく理論は経験や現実を超える要素をもっている。そうした理論は疑似科学的理論と同様，さまざまな手段を用いて，非現実的要素と現実との一致を図ろうとする。その手段のうちで，もっとも広く利用され，また，もっとも効果があるのが日常語だというわけである。「人は，いろいろな手段を用いて現実との合致をえようと努力する。その手段のうち，もっとも広く用いられ，もっとも有効なものは，派生を表す言葉の不明瞭さである」(TR 1797)。

たとえば，経済学の「価値」という用語は日常語としては「麦の一山」と同じような明白な意味をもっている。しかし，一山の意味を定義するとなると，たちまち，その意味は不明瞭になる。これと同じような曖昧さが「価値」にはある。

こうした漠然とした用語を支えているのは感情である。この用語自体が感情にもとづいて使用され，それがさまざまな感情を喚起する。そして，その感情を利用して説得が行われ，それが大きな効果をもたらすというのである。その効果は，とりわけ，この用語を受け入れる人間が，この用語によって引き起される感情を自覚していない場合に一きわ大きなものとなる。

たとえば，1905年のロシア革命ではロシア政府の支持者は，革命党員の死刑を処刑（essecuzione）と称し，革命党員による政府の役人の殺害を殺人（assassinio）と呼んだ。革命派は，これとは逆に，前者を殺人，後者を処刑と呼んだ。同じことは「没収」とか「盗み」についても言える。この例からも，こうした用語の説得効果は明白だろうというのである(TR 1551, 1552)。

同じような例として，現代では，あることがらを推奨しようとすれば，そのことを，「近代的」とか「民主主義的」とか「人間的」というように言わなければならないとも述べている。もう一つ，興味深い例をパレートが挙げているので紹介しておこう。パレートによると，自由という言葉は，これを使用したり受け入れたりする人間にとって都合のよい状態を示しているという。すなわち，19世紀中葉のイギリスでは，自由党というのは，身体，財産を自分の好きなように処分する能力を，部分的にせよ個人から奪うような束縛を，可能な限り少なくすることを望む党のことだと言われていた。だが，今日では逆に，そうした束縛の増大を望むのが自由党と呼ばれているというのである（TR 1554)。

さて，曖昧な用語ばかりでなく，この用語を使った論証（派生）もまた感情によって支えられている。すでに紹介したように，こうした感情は説得する側にも，また，される側にも働いている。たとえば，ある掟を権威に訴えて論証し，その結果その掟が容認される場合に，論証する側と受け入れる側の双方に働くのは権威の残基である。また，詭弁は論理的推論の欲求(残基）にもとづいているのだが，この論理は，その形式によって受容されるのではない。受容に際しての判断は，論理ではなく詭弁によって促された一定の感情にもとづいているのである。

「あらかじめ騙されるがままになる心構えをもった人間だけが，普通，この論理的詭弁によって騙される。もっと，はっきりと言うと，この種の欺瞞はありえない。推論する者と，その推論を受け入れる者とは互いに感情の一致を通して了解し合っているのである。かれらは，余計なことに，この一致に論理的詭弁の衣を重ねているのである」(TR 1543)。

なお，パレートは騙すことに関連して，こうも述べている。曖昧な用語を利用して，あることがらを論証するとき，人は「用語の曖昧さによるごまかしのおかげで私の証明は正しいのである」などとは言わない。だから，そうした派生を受け入れる人間は知らないうちに言葉だけの推論というごまかしの罠に陥ってしまうのだと（TR 1418)。

派生の社会的効用と理想

すでに何度か触れたように，パレートは理論のもつ真理性と社会的効用を峻別している。ここでは理論（派生および派生体）の社会的効用にかんする見解を見ることにしよう。

パレートによると，ある社会における，もっとも支配的で効力のある残基というものは，社会の存立にとって不可欠なものである。つまり，それらがなければ，その社会は解体し消滅してしまう。また，こうした残基にもとづく派生体も，その限りで，社会の利益の観点からすれば，損なわれたり減少したりしないことが望ましい。なぜなら，人びとが，道徳的または宗教的掟とか，より洗練された道徳理論や宗教理論のかたちをとったこれらの派生体の指し示す理想の追求を通じて，自分たちの幸福を実現しようとすればするほど，社会はより安定的なものとなるからである。別の言い方によると，支配階級を除く多数の民衆が事実をあるがままに見るよりも，理想目的に照らして事実を思い描くことの方が社会は安定し，社会にとって利益になるというのである。要するに，人びとが経験や事実と合致しない理論を合致していると信じたり，特定の想像上の目的（理想）を追求することは人間社会にとって大いに役に立つというのである（TR 1882，1896，1932)。

たとえば「正義の理想」というのは，パレートによると，集合体への固執（残基II）と社会均衡の変化に反対する感情（残基V-α）とが結びついた複合残基の産物であるが，この理想はとりわけ社会秩序の維持に，きわめて強力な効果を発揮するという（TR 1216)。

このように理想と結びついた道徳や宗教の派生体が社会の維持に不可欠なものとされているわけだが，この派生体の性質の留意すべき重要な点をここで，確認してみよう。

まず第1の点は，この派生体というのは，あくまでも残基にもとづいているのであるから，派生体の基底にある感情との結びつきを無視して，派生体そのものを絶対化する誤りは避けなければならないということである（TR 1932)。

第2の点は，ここでの派生体は説明であり，多かれ少なかれ説得を意図したものであるが，派生や派生体は説得の形式であって，派生や派生体そのものに説得力があるわけではない。説得力は派生や派生体によって促される感情に含まれているということである。これらの感情のうち，説得にあたって大きな力を発揮するのは利害と結びついた感情や社会性にかんする残基と結びついた宗教的感情である（TR 1892)。

第3の点は，感情から生み出された正義とか善あるいは進歩とか連帯，民主主義といった「形而上学的な」観念が，派生を通じて絶対的形式をもった原理とか理想のかたちで示されるのだが，この場合，一般に，真なるもの，正しいもの，道徳的なものだけが役に立つという，いわば真理性と効用を混同した説明がおこなわれるということである（TR 1896)。

さて，つぎにこのような理想とその現実的効果との関係にかんするパレートの説明を見ることにしよう。

数多く見られる一般的なものとして，理想つまり想像上の目的の追求によって，実際には，それを下回る結果が獲得される事例が指摘されている。たとえば，人びとは自分の幸福や社会の繁栄の理想を目指して行動する。しかし，それは実現されず，結果としては現実的な利益を得るだけに終わる。もっとも，その利益は理想を追求しなければ獲得されなかったものであるが（TR 1869)。

このような関係を説明するイデオロギーにあっては，理想と実利が混同されるか，もしくは少なくとも両者は非常に近いものと見なされる。そして，その説得の仕方には二通りある。1）理想の追求は自分や他人の利益を得る最上の方法であると信じさせる。2）実際には自分や他人の利益を求めているにもかかわらず，理想目的を追求していると信じさせるというのがそれで

ある。

「利己主義者は，意識的にm［実際上の目的］を目指しながらT［理想］を主張する行動をとる。だが，多くの，まったく善意の人びともこれと同じことをやる。冷笑的なエゴイストは稀であるが，純粋の偽善者もまた稀である。ほとんどの人間は自分の利益と社会性にかんする残基との折り合いをつけようとし，自らの幸福の達成を望みながら，それを他人の幸福の達成のように見せかけようと望む。宗教や倫理，愛国主義，人道主義，党派への忠誠などの外套（manto）でもってエゴイズムを覆い隠そうとする。物質的な満足を目指しながら理想のみを追求しているように見せかけようとする」（TR 1884）。

いずれにしても，想像上の目的（理想）の追求は人間社会にとっては非常に有益である。そして「現在知られている拘束［条件］が変わらないかぎり，社会はこうした目的なしには存続しえない」というのである（TR 1878）。

派生の変動

パレートは社会均衡を生み出す要因として，(a)残基，(b)利害，(c)派生，(d)異質性と社会的循環の四つを挙げ，これらの要因の相互依存関係の分析をおこなっている（TR 2203, 2205）。あらかじめ，いくつかの解説をしておこう。

まず，社会均衡というのは，ここでは，これらの要因の相互作用によってたえず一定の方向を保とうとする現実の社会状態を指すものと理解してよいであろう（TR 2068）。

また，異質性と社会的循環というのは，実質的には社会の上層と下層との間のエリートの循環のことを指している。

そして，これらの要因の相互依存関係の分析で，まず取り上げられるべき，もっとも重要な組み合わせとして利害と循環との間の作用と反作用の関係が指摘されているが（TR 2299），これら二つの要因は切り離しがたく結びついているために，多くの場合，これらは利害・循環関係として，一括して扱われている。

さて，上記の諸要因の相互作用は円環的な構造をもって結びついている。すなわちa-b-c-d-a-b…といったかたちで，それぞれの相互依存関係が連環をなしている。そして，これらの連環的な相互作用を通して社会状態はたえず変化しているというわけである。この変化をパレートは周期をもった振動つまり律動としてとらえている。

こうした社会変化のうち，時代を画するような激しい律動的変化は，利害・循環関係によって生み出されるという（TR 2323）。この変化は後に見るように残基Ⅰと残基Ⅱの変化に照応している。そして，このような利害・循環関係を含む前記の諸要因と経済的要因の相互作用にもとづく変化の総体が「社会的振動」というかたちで把えられているのである。

このような社会的振動のなかでの派生体の振動つまりイデオロギーの律動的変化を，パレートは内的側面と外的側面とから分析している（TR 2339以下）。

内的側面というのは，派生体（イデオロギー）が，その本来の性質にしたがって振動する面を指す。この内的側面の分析によって，結局つぎのようなことが明らかにされる。派生体の振動は，多かれ少なかれ，理論を現実に完全に適用しようとするところから生み出されること，そして，その際に理論のもっている社会的効用と真理性（現実との一致）との混同が見られるということである。

外的側面というのは，派生体の振動が感情とか利害，エリートの循環などによって規制される側面を指す。この場合，厳密には，これらの外的条件にたいする派生体の反作用も，この側面に含まれるのであるが，その影響は小さいので，重視されてはいない（TR 2553）。

まず，内的側面の分析内容から見ていくこと

にしよう。派生体（イデオロギー）の変動の歴史は，人間の思想の歴史に他ならない。それは，とりわけ残基Ⅰと残基Ⅱに示される感情の間の対立，そしてまた論理的行為と非論理的行為との対立の表れとしてとらえられる。この対立は残基Ⅰが非宗教的感情，残基Ⅱが宗教的感情を表現するという理解から，信仰と不信仰(懐疑)をめぐる対立としても説明される（TR 2048)。したがって派生体（イデオロギー）の振動の歴史は，このような対立がもたらす宗教感情の歴史的な大きなうねりというかたちで説明されることになる。

一般に，社会の存続は残基Ⅱ（集合体への固執の残基）によって表明される。したがって，社会の存続にとって有用な観点にもとづく理論は，この残基Ⅱの感情によって受け入れられる。他方，論理・実験的観点に外見上似ている，いわゆる疑似科学的観点にもとづく理論は，残基Ⅰ（組み合わせの残基）によって受容される。こうして，残基Ⅰと残基Ⅱの律動に対応して，それぞれの派生体の振動が続くというのである。この運動は，表面的には信仰の時代と懐疑主義の時代との交代の系列（歴史）としてもとらえられる（TR 2341)。

さて，長期的に見ると，残基Ⅰにたいする残基Ⅱの割合は，とりわけ知的階層のなかで著しく変動し，これに対応して派生体（理論）の面で重要な変化が生じるという。たとえば，残基Ⅱの力が衰え，残基Ⅰが新たな活力を得る時代にあっては，残基Ⅱから導き出された理論は現実と矛盾するように思われ，それらは「時代遅れの偏見」と見なされる。そして，残基Ⅰから導き出された新しい考え方，たとえば「理性が信仰，偏見にとって代わらなければならない」という主張が受け入れられるようになる。

だが，残基Ⅱが社会にとって有用であることが知られるようになってくると，上記とは逆の方向の運動が始まり，今度は，残基Ⅰの派生体が，さきの残基Ⅱのそれと同じ扱いを受け，現実との不一致が指摘されて，たとえば，「直観が理性にとって代わらなければならない」とか「理想主義が経験主義，実証主義，科学にとって代わらなければならない」といった主張が力を得るようになる。古代ギリシャではソクラテスやプラトンの派生は残基Ⅰに照応しており，これが社会基盤の崩壊を防ぐ効用と結びついた残基Ⅱの反撃を受けたのであった。中世では，形而上学的な唯名論と実念論の対立が，その例に当たる。つまり唯名論が残基Ⅰを，実念論が残基Ⅱに照応していたというわけである（TR 2343, 2370)。パレートは続ける。現代では，直観とか理想主義を賞揚する見解は自然科学では排除されているが，社会科学では依然として存続している。その理由は，そうした見解が社会的効用をもつからである。また，残基Ⅱから導き出される結論のほうが残基Ⅰから引き出される結論よりも現実に近いことが非常に多いからでもある。とはいえ，残基Ⅰと論理・実験的推理の使用がなければ，あらゆる進歩は不可能だから，運動は残基Ⅰが支配する方向へと向かうだろうが，いずれにしても振動は無限に続くというのである（TR 2340)。

ところで，人間精神のこのような両極間の振動は，理論がもっている社会的効用と真理性(現実との一致)との混同から生じる。したがって，この混同が見られなくなり，「ある信仰は，たとえ，それが実験的［科学的］に間違っており，ばかげたものであっても，社会にとっては効用がある」という見方が，一部の知的エリートのなかにせよ抱かれるようになれば，この振動は，あるいは終息するかも知れないとパレートは述べているのである（TR 2341)。

さて，つぎに外的側面の分析を見ることにしよう。まずパレートは前記の内的側面の分析で問題にした派生体が，実際には社会運動の結果として生み出されていることを指摘する。そしてペルシャ戦争以降の歴史的事実を通じて，この社会運動に対応した派生体の振動の分析をおこなっている。この振動についても，内的側面の分析の場合と同様，残基Ⅰと残基Ⅱに表現さ

れる感情の波動が主として取り扱われ，残基Ⅰに対応した理性や論理を追求する立場と残基Ⅱに対応した伝統や非論理的要素を重んずる立場との間の振動が明らかにされている。ここでは，近代以後の動きの説明を紹介しておこう。

ルネッサンスの経済的繁栄期に優勢となった残基Ⅰにたいして，民衆の間に根づよい残基Ⅱが反作用して宗教改革が可能になる。その後，残基Ⅰを強化する経済条件の存続によって，残基Ⅰが力を回復し，18世紀の啓蒙主義の時代を迎える。そして経済的繁栄の条件のなかで，18世紀の終わりにかけて残基Ⅰにたいする残基Ⅱの割合を示す曲線は低下し始めるが，フランス革命によって残基Ⅱの下降は宗教的反作用のかたちをとって反転し，1815年直後に頂点に達する。その後，ふたたび，この曲線は下降し始める。大工業，大商業，国際金融の進展によって，残基Ⅰの支配が強まり，実証主義者，自由主義者，知識人たちが「科学の女神の旗を掲げて」戦うようになる。この運動は1860-70年にかけて頂点に達する。その後，この運動は衰退し，20世紀初頭の10年間に，残基Ⅱに有利な反作用が始まる。そして，その後，残基Ⅱの隆盛は，種々のかたちの愛国主義，たとえばナショナリズムとか帝国主義を強化するに至っているというのである（TR 2360-2367，2384-2390）。

このようにパレートはイデオロギーが残基Ⅰと残基Ⅱに示される感情の変化，および，これと結びついたエリートの循環ならびに経済条件の変化の影響のもとで振動することを明らかにしているのである。

参照文献

[1] Aron, Raymond, *Les étapes de la pensée sociologique* (Gallimard) 1967.

[2] Pareto, Vilfredo, *Trattato di sociologia generale* (Edizioni di Comunita) 1981：*Traité de sociologie générale (Œuvres complètes,* tome XII, Genève, 1968)：*The Mind and Society* (Jonathan Cape) 1935：『社会学大綱』（法政大学出版局）1987年

[3] Pareto, Vilfredo, *Cours d' économie politique (Œuvres complètes,* tome I, Genève, 1964)

[4] Parsons, Talcott, *The Structure of Social Action* Vol. I (The Free Press) 1968

[5] パーソンズ，T.（稲上他訳）『社会的行為の構造』2（木鐸社）1986年